





『恋は初めチヨロチヨロ中。パッパ。』

く左側のすゝめく

今朝も、成子坂製作所の食堂には小気味よい包丁の音が静かに響く。

ふんわりと温かいお出汁の香りは、作り手の優しさがそのまま湯気となってわたしを包み込んでくれる。

「おはよう、舞ちゃん。もうすぐ用意が出来ますからね〜」

もう、本当に小結さんにはかなわないな……また先に「おはよう」を言われてしまった。

近頃のわたしは、小結さんと時間を共にすることで、温かい優しさと、芯のある真心は、無条件で受け手の目頭を熱くさせるのだと、気づかされた。

いや——わたしは既にそれを知っていた——。

深くひと呼吸すると、今日もわたしたちの一日がはじまる。

「小結さん、おはようございます。わたし、小鉢並べておきますね」

「はい、ありがとうございます。お願いするわね〜」

素材本来の味を引き出すべく、丹念に下処理された愛らしい小鉢たち。

作り手の想いを壊さぬよう、慈しみをもって配膳台に並べていくと、きんぴらごぼうの滋味と甘辛い味付けが鼻腔をくすぐり、脳を刺激し、空っぽの胃が収縮していく。

「ふふっ、舞ちゃんのお腹の虫さん、今日もご機嫌ですね〜」

他の人に聞かれると恥ずかしい音なのに。  
——小結さん、貴方であればわたしは——。

——ちようど二週間前——

小結さんは怪我をした。

もちろん、成子坂製作所では蜂の巣をつついたような大騒ぎとなったことは言うまでもなく、料理を得意とするメンバーが緊急収集され、今後の食堂運営について議論がなされた。

けれども皆、それぞれ学業や本業を抱えていたため、議論は難航。責任を感じた薫子さんや盟華さんが人材を派遣すると提案したことで、事態は収束するかに思われた。

そんなときだった。怪我をした当の本人である小結さんが、

「それは出来ません。成子坂の管理栄養士は私です」

そう、ピシヤリと言ったのだった。

いつも柔和な小結さんからは想像がでない程、その目は厳しく、誰もがその言葉の重みと彼女の不退転の決意に、二の句が継げないでいると、

「心配しないでください。これくらいへっちゃらですよ」

と、マシユマロみたいに温順な、普段の小結さんがたらずんでいた。

思わず、わたしは、  
「わたしもお手伝いさせてください」

シタラちゃんやジニーちゃんが驚いたことは言うまでもなく、逆に足を引っ張るのではないかという声もあった。

だけど、わたしは——

「大丈夫です。わたしにやらせてくださいっ」

いま思えば、どこにそんな勇気があったのかと自分でも不思議に思う。

でも、小結さんは、

「はい、舞ちゃん、よろしくお願ひしますね」

そういつて、手を取ってくれた。

その手の温もりをわたしはきつと忘れないだろう。  
いや——忘れられるはずがない——。

そんなことがあって、わたしの目の前にいる小結さんは、松葉杖を突きながら懸命に食堂の厨房に立っ  
ついで、そしてわたしは——貴方と同じ場所で、  
同じ時間を過ごしている——。

「舞ちゃん、お米が研ぎ終わったから、この土鍋、  
お願いしますね〜」

「はい」

小結さんのこだわりで、成子坂の食堂のご飯は大  
きな土鍋で炊かれている。

毎日毎日、それこそ一日も休まず小結さんは、こ  
んな重いものを……と、考えただけで頭が下がる衝  
動に駆られ、また、目頭が熱くなってしまう。

「舞ちゃん、最初はごくごく弱火ですからね〜」

「もう、わかってますよ、『はじめチョロチョロ、  
なかパツパ、赤ちゃん泣いても蓋取るな』ですよね」

「はい〜。ちゃんと覚えてくれて、舞ちゃん、偉  
いわ〜」

偉いのはわたしじゃない。小結さん、貴方です。  
——だから、わたしは、そんな貴方を——。

小結さんが教えてくれた言葉を繰り返すと、わた  
しはいつも思う。

そう、これは、まるで

——わたしたちみたい——。

——はじめチョロチョロ——最初の火加減をごくご  
く弱火にするのは、土鍋の全体を温めて、お米にム  
ラなく水分を吸収させるため。お米に気が付かれな  
い程度に温めていくのがポイントだ。

そう、わたしたちは、まだ何もはじまってもいな  
い。貴方は、まだ何も知らない……。

今、この瞬間のトロっとした弱火と同じで、わた  
しの胸の小さな埋み火が燻っているだけ……。

でも、まかり間違つて慌てて強火にしてしまえば、底が焦げて台無しになる。そう全てが……。

——なかパツパ——全体が温まつたら、次は一気に強火にして沸騰させる。この見極めが大切だと小結さんは教えてくれたが、本当にその通りだと思う。

だって、本当のわたしは、いつだって貴方に焦がれていて……。

もしもこの願いが叶うのならば、何を失つてもいいと、この業火に身を委ねたい衝動に駆られる……。貴方とならわたしは、どこまでだって堕ちていけるのに……。

——赤ちゃん泣いても蓋取るな——お米が加熱されたら、高温でしっかりと蒸らすまでは、絶対に蓋を開けてはいけない。

もし、わたしがわたしの蓋を開けたら？

小結さん、貴方はどんな顔をしますか……。

わたしの心は、もうこんなに熱を帯び、蒸れているというのに……

でも、わかっている。  
わかっているからこそ、わたしの蓋は、何があっても開けてはいけない……。

きつとわたしのこの想いで溢れた土鍋は、貴方を困らせるだけのパンドラの箱なのだから……。

「舞ちゃん、すっかりお米を炊くのが上手になって、私、嬉しいわ〜」

「ほ、本当ですか？」

「ええ、もう私が教えることはないわね〜」

「そんなことないですよ。わたし……もつと……小結さんに……教わりたい……です」

「ふふつ、きつと舞ちゃんは、いいお嫁さんになれますね〜」

「え……」

そう、わたしの恋は  
——いつまでも炊き上がらない——。

～ La Fin ～

△後書きに代えて——お手に取って頂いた皆様へ、  
心から感謝を込めて——▽

たくさんの人のために、何かをしてあげてくれることを喜びだと感じることで出来る人は、素敵な心を持った人だと思えます。そして、その優しさは、必ず他者へと伝播していくと信じています。

けれども、その優しさが眩し過ぎたから、伝えられないまま、胸の奥深い場所に、そつと埋めてしまつた幾つもの言葉たち……。

それでも、それは、失くしてしまうには温かすぎで、だからこそ人は、ふとした瞬間、過去を掘り起こしては、切なさや懐かしさの狭間で揺れ動くのではないのでしょうか。

きつとそれは、絶対に——忘れられるはずがない——経験のだと、そう慈しみながら、このお話を考えてみました。



# 雑談!

表紙制作についての  
コメントや小説の感想など

らいえり表紙担当  
(ゆみ推し)

ほんめい表紙担当  
(桃歌推し)

かおサン&まいこゆ  
表紙担当 (銀華推し)  
星しげたくおにいさんだい

\*キャラ代理でお送りします

## ～恋は初めチョコチョコ中パッパ編～



表紙は『初めチョコチョコ～』のワードのニュアンスと小結さんのあったかい感じのイメージからちょっと懐かしい感じの表紙を目指しました。同人誌っぽい構図



土鍋ごはんがおいしそうだしタマちゃんの猫口がかわいい



割烹着はロマン…実装はいつですか



タマちゃんの煮え切らない感じがたまらないですね…見えない矢印に気づいて小結さん!



全体的に言葉選びがうますぎて流石



自分に自信のないタマちゃんの心情がとてよく表現されていて良かったですね。まるで雨上がりの庭のように懐かしいような、それでいて切ないような、色々ともどかしく、想像しがいのあるお話でした



今後の展開に期待して★5です



